

特別講演

生命を捉えなおす—動的平衡の視点から—

生物学者・作家
福岡 伸一

現代人が生命(いのち)の問題を考えると、当たり前のこととしている前提がある。それは、生命とは、手、足、胴体、頭、あるいは各臓器といった“部品”が組み合わさってできた、プラモデルみたいなものであるという見方である。機械論的生命観といってもいい。だから、壊れたところは取りかえればよいし、古いところは新しくすればよい。しかし、この考え方は、私たちの身体を考える上で、ほんとうに正しい生命の見方なのだろうか。

私は一人のユダヤ人科学者を思い出す。その名をルドルフ・シェーンハイマー(1898~1941)という。彼は、研究途上、謎の自殺を遂げたこともあって、今ではすっかり忘れ去られてしまったが、彼が示そうとした生命の姿は、機械論とは違う、もうひとつの画期的な生命観だった。彼は、生命が、流れの中にあることを明確なか

ちで最初に示した科学者だった。私たちが食べた分子は、身体を構成する分子と絶え間なく交換されつづけている。つまり私たち生命とは、部品からなりたっている分子機械ではなく、部品自体のダイナミックな分解と合成の流れの中にたゆたう“分子の淀み”なのである。

自らを積極的に壊し続けることによって、系内にたまるエントロピーを捨てつづけ、またそれを作り直すことでなんとかバランスを保つ。それが生命体の特性である。シェーンハイマーの思考を発展させ、私はこれを「動的平衡」と呼びたい。動的平衡の生命観は、私たちの身体が、時間の関数として絶えず変化しつつ、それでいて柔軟で、適応的で、相補的であり、同時に、レジリエントなものであることも説明してくれる。ポストコロナの生命哲学として、動的平衡論について考察してみたい。

略歴は135頁に記載